

# 2024/02/15 セミナー資料

大柴寿浩

## 記号

- $\overline{\mathbf{R}} := [-\infty, +\infty] = \mathbf{R} \cup \{\pm\infty\}$
- 集合  $U$  の開近傍系を  $I_U$  とかき, 点  $x$  の開近傍系を  $I_x$  とかく.

## 1 コホモロジー構成可能層

### 1.1 理想複体

$A$  を可換環とする.  $M \in \mathbf{D}^b(A) := \mathbf{D}^b(\text{Mod}(A))$  を  $A$  加群の導来圏の対象とする.  $M$  が理想対象<sup>\*1</sup> (perfect object) であるとは, 有限生成射影的  $A$  加群の有界複体と擬同型であることをいう.

命題 1.1 ([KS90, Exercise I.30]).  $A$  を可換環とする.

- (i)  $X \rightarrow Y \rightarrow Z \xrightarrow{+1}$  が  $\mathbf{D}^b(A)$  における完全三角で,  $X$  と  $Y$  が理想的ならば,  $Z$  も理想的である.
- (ii) 理想対象の直和因子も理想対象である.
- (iii)  $M \in \mathbf{D}^b(A)$  を理想対象とする.  $M^* := \text{RHom}_A(M, A)$  とおく.  $M^*$  は理想対象であり, 標準的な射  $M \rightarrow M^{**}$  は同型である.

$A$  がネーター環で大域次元が有限であるとする.

- (iv)  $\text{Mod}^f(A)$  の導来圏  $\mathbf{D}^b(\text{Mod}^f(A))$  の任意の対象は理想的である.
- (v)  $\mathbf{D}_f^b(A)$  で各コホモロジーが  $\text{Mod}^f(A)$  に属す対象の導来圏を表す.  $\mathbf{D}^b(\text{Mod}^f(A)) \rightarrow \mathbf{D}_f^b(\text{Mod}(A))$  は圏同値である. ■

証明は略.

擬連接かつ  $\text{tor}$  次元が有限であることと同値らしい. ([SP, lem 15.74.2])

---

<sup>\*1</sup> [Ue] による訳にしたがった. 定訳は未だ無いと思われる.

## 2 $\gamma$ 位相

■錐（体） [KS90] に錐の定義が書いてなかったのでまとめておく。[BouTVS, Mo76] を参考にした。

定義 2.1.  $n$  次元実ベクトル空間  $V$  の部分集合  $\gamma$  が次の条件をみたすとき，錐（あるいは錐体）(cone) であるという。

任意の実数  $t > 0$  に対し,  $v \in \gamma \implies tv \in \gamma$ .

コメント 2.2. [Mo76] では  $\gamma \neq 0$  も課している。空集合は錐である。

$$\gamma = \{(x_1, x_2) \in \mathbf{R}^2; 0 < \arg(x_1, x_2) < 7\pi/4\}$$

は錐である。（図 1）。

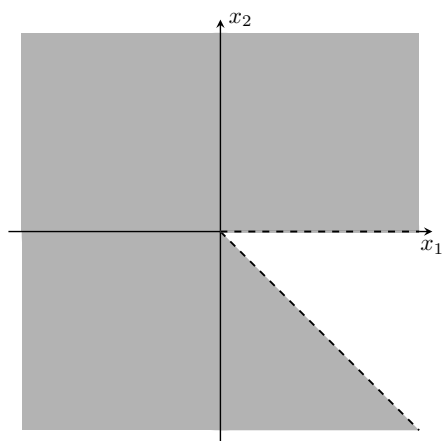


図 1 錐の例

次の例を見ると，有界でないことが大事っぽい。

例 2.3.  $\gamma := \{(x_1, x_2) \in \mathbf{R}^2; 0 < \arg(x_1, x_2) < \pi/3, \|(x_1, x_2)\| < 1\}$  は錐ではない。（図 2）

■ $\gamma$  位相  $\gamma$  から定まる位相を定義する。

定義 2.4.  $V$  を  $n$  次元実ベクトル空間とし， $\gamma$  を 0 を頂点とする閉凸錐とする。  $V$  の  $\gamma$  位相 ( $\gamma$ -topology) とは，  $V$  の位相であって，その開集合  $\Omega \subset V$  が次の条件 (i)–(ii) をみたすものをいう。

- (i)  $\Omega$  は  $V$  の元の位相に関して開集合である。
- (ii)  $\Omega + \gamma = \Omega$ .

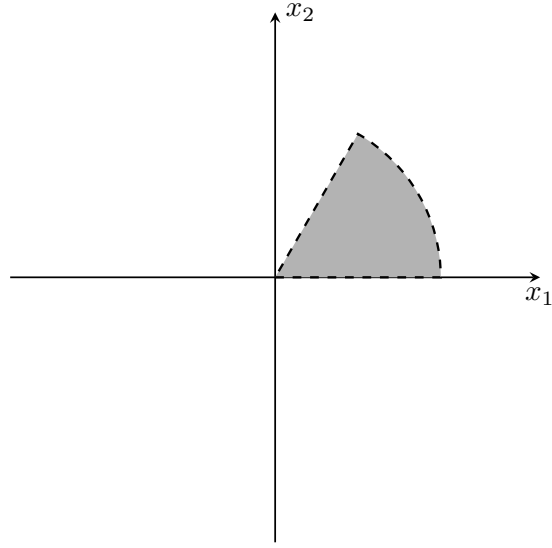


図2 錐でない例

例 2.5.  $X = \mathbf{R}$ ,  $\gamma = [0, +\infty[$  のとき,  $\mathbf{R}$  の  $\gamma$  位相に関する開集合は,  $-\infty \leq c \leq +\infty$  を用いて  $]c, +\infty[$  とかけられるものである.

$\therefore \mathbf{R}$  の開区間  $\Omega := ]c, d[$  に対し,

$$\begin{aligned}\Omega + \gamma &= \{x + x' \in \mathbf{R} \mid x \in \Omega, x' \in \gamma\} \\ &= \{x + x' \in \mathbf{R} \mid c < x < d, 0 < x' < \infty\} \\ &= \{x + x' \in \mathbf{R} \mid c < x + x' < \infty\} \\ &= ]c, +\infty[.\end{aligned}$$

$\gamma$  に対し, 反転錐 (opposite cone)  $\gamma^a$  を

$$\gamma^a := -\gamma$$

で定める.\*2

$\gamma$  位相に関する開集合・閉集合・近傍をそれぞれ  $\gamma$  開集合・ $\gamma$  閉集合・ $\gamma$  近傍とよぶ.

$\gamma$  位相に関する開集合  $X$  はもとの  $V$  の位相に関する開集合になるので,  $\gamma$  位相は元の位相よりも荒い. したがって,  $X$  を  $\gamma$  位相に関する開集合と考えるとき,  $X_\gamma$  とかくことにすると, 自然な連続写像  $\phi_\gamma: X \rightarrow X_\gamma$  が定まる.

**命題 2.6.**  $X_\gamma$  を  $V_\gamma$  の開集合とし,  $F$  を  $X_\gamma$  上の層とする.

\*2 あとで導入する体蹠点写像  $a: X \rightarrow X; x \mapsto -x$  の像としてもよい (はず?).

(i)  $U \subset X$  を凸開集合とすると,

$$\mathrm{R}\Gamma(U + \gamma; F) \rightarrow \mathrm{R}\Gamma(U; \phi_\gamma^{-1}F)$$

は同型である.

(ii)  $K \subset X$  を凸コンパクト集合とすると,

$$\mathrm{R}\Gamma(K + \gamma; F) \rightarrow \mathrm{R}\Gamma(K; \phi_\gamma^{-1}F)$$

は同型である.

(iii)  $F \rightarrow \mathrm{R}\phi_{\gamma*}\phi_\gamma^{-1}F$  は同型である.

(i) の射の構成は以下の通り.  $U + \gamma$  は  $U + \gamma + \gamma = U + \gamma$  をみたすので,  $U$  の  $\gamma$  開近傍である. したがって,  $F$  の切断の射  $\Gamma(U + \gamma; F) \rightarrow \varinjlim_{U+\gamma \in I_U} \Gamma(U + \gamma; F) = \phi_\gamma^p F(U)$  が存在する. これに層化から定まる射  $\phi_\gamma^p F(U) \rightarrow \phi_\gamma^{-1}F(U)$  を合成することで

$$\Gamma(U + \gamma; F) \rightarrow \Gamma(U; \phi_\gamma^{-1}F)$$

を得る. これを導来圏に持ち上げれば, (i) の射が得られる.

証明. 次の 5 段階に分けて証明する.

- (a)  $\psi: \Gamma(U + \gamma; F) \rightarrow \Gamma(U; \phi_\gamma^{-1}F)$  が同型であることを示す.
- (b) コンパクト凸集合  $K$  に対し  $\Gamma(K + \gamma; \phi_\gamma^{-1}F) \rightarrow \Gamma(K; \phi_\gamma^{-1}F)$  が同型であることを示す.
- (c) 随伴から定まる射  $F \xrightarrow{\sim} \phi_{\gamma*}\phi_\gamma^{-1}F$  が同型であることを示す.
- (d)  $F$  が脆弱層ならば,  $\mathrm{R}\Gamma(U + \gamma; F) \cong \mathrm{R}\Gamma(U; \phi_\gamma^{-1}F)$  である.
- (e) 一般の  $F$  に対し  $\mathrm{R}\Gamma(U + \gamma; F) \cong \mathrm{R}\Gamma(U; \phi_\gamma^{-1}F)$  である.

(a)  $\psi: \Gamma(U + \gamma; F) \rightarrow \Gamma(U; \phi_\gamma^{-1}F)$  が同型であることを示す.

単射性:

全射性:

□

■ここから新しい話.  $\phi_\gamma^{-1}\mathrm{R}\phi_{\gamma*}F$  を得る別の方法について述べる.  $X = V$  のとき,

$$(2.1) \quad Z(\gamma) := \{(x, y) \in X \times X; y - x \in \gamma\}$$

とおき,  $q_1, q_2$  を  $X \times X$  から  $X$  への射影とする.

例えば,  $X = \mathbf{R}$  で  $\gamma = [0, \infty[$  のとき,

$$\begin{aligned} Z(\gamma) &= \{(x, y) \in \mathbf{R}^2; y - x \in [0, \infty[ \} \\ &= \{(x, y) \in \mathbf{R}^2; y - x \geq 0 \} \end{aligned}$$

である. (図 3)

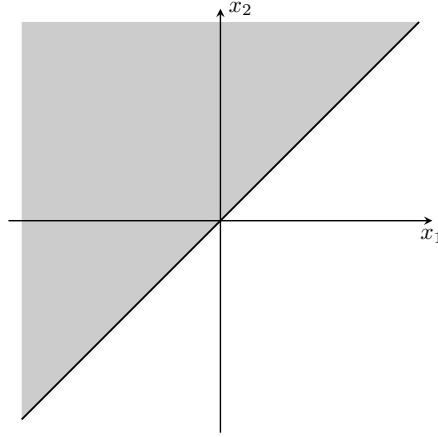


図 3  $Z(\gamma)$  の例

命題 2.7.  $F \in D^+(X)$  に対し,

$$Rq_{1*} \left( (q_2^{-1}F)_{Z(\gamma)} \right) \cong \phi_\gamma^{-1} R\phi_{\gamma*} F$$

が成り立つ.

証明. 証明の方針は,

- 射を作って,
- 擬同形であることを示す.

$\tilde{q}_j: Z(\gamma) \rightarrow X$  を  $q_j$  の制限とする. このとき,  $X$  の任意の  $\gamma$  開集合  $\Omega$  に対し,

$$\tilde{q}_1^{-1}\Omega = \{(x, y) \in X \times X; x \in \Omega, y \in x + \gamma\} \subset \tilde{q}_2^{-1}\Omega$$

が成り立つ.

□

## 参考文献

- [BouTVS] ブルバキ, 位相線形空間 1, 東京図書, 1968.
- [B+84] Borel, *Intersection Cohomology*, Progress in Mathematics, 50, Birkhäuser, 1984.
- [G58] Grauert, *On Levi's problem and the embedding of real analytic manifolds*, Ann. Math. 68, 460–472 (1958).
- [GP74] Victor Guillemin, Alan Pollack, *Differential Topology*, Prentice-Hall, 1974.
- [KS90] Masaki Kashiwara, Pierre Schapira, *Sheaves on Manifolds*, Grundlehren der Mathematischen Wissenschaften, 292, Springer, 1990.

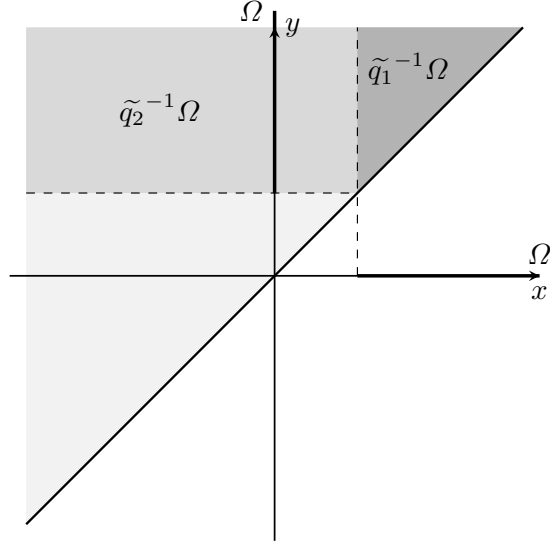


図4  $\tilde{q}_1^{-1}\Omega \subset \tilde{q}_2^{-1}\Omega$

- [KS06] Masaki Kashiwara, Pierre Schapira, *Categories and Sheaves*, Grundlehren der Mathematischen Wissenschaften, 332, Springer, 2006.
- [Le13] John M. Lee, *Introduction to Smooth Manifolds*, Second Edition, Graduate Texts in Mathematics, **218**, Springer, 2013.
- [Mo76] 森本光生, 佐藤超函数入門, 共立出版, 1976.
- [R55] de Rham, *Variétés différentiables*, Hermann, Paris, 1955.
- [Sa59] Mikio Sato, *Theory of Hyperfunctions*, 1959–60.
- [S66] Schwartz, *Théorie de distributions*, Hermann, Paris, 1966.
- [Sh16] 志甫淳, 層とホモロジー代数, 共立出版, 2016.
- [SP] The Stacks Project.
- [Sp65] Michael Spivak, *Calculus on Manifolds*, Benjamin, 1965.
- [Ike21] 池祐一, 超局所層理論概説, 2021.
- [Tak17] 竹内潔,  $\mathcal{D}$  加群, 共立出版, 2017.
- [Ue] 植田一石, ホモロジー的ミラー対称性, <https://www.ms.u-tokyo.ac.jp/~kazushi/course/hms.pdf> 2024/02/04 最終閲覧.